

## 平成 26 年度東広島市教育委員会主催・広島大学マスタース共催市民講座 「農業の多面的機能を考えてみよう」実施報告

広島大学マスタース会員 山本禎紀

6月の4回の土曜日に中央生涯学習センターにおいて、東広島市の農業について、市民のみなさんといっしょに考えてみようという主旨で、マスタース会員の山本禎紀と河野憲治が企画し、市内の農業を指導している関係機関〔東広島市農林水産課（大歳英之 他）、広島中央農業協同組合（藤井優一）、広島県農林整備・農業振興財団（船越建明）、東広島市園芸センター（池田重和）、西条農業高校（澤井晃）〕の皆様の協力を得て実施しました。

参加数は募集人数の約半分（20人前後）でしたが、討論では主に農業者からの悩みや問題がだされ盛り上がりましたが、市民と農業との関係を生活や環境との関係で捉えたり、健全な農業の維持と持続には、市民からの積極的な関与が必要だとするような話しあいにはなりませんでした。

第1回（6月7日）では「農業と人々の暮らし、東広島市の農業の現状とこれから」と題して、農業の経済（産業）的、環境（生態）的、社会（文化）的役割などで農業の多面的機能を確認した後、東広島市から、産業としての農業の現状と、経営（所得）を安定させる様々な施策を、また、直面する耕作放棄地の増加や後継者不足の対策として、地域集落を農事法人化する必要性とその現状について説明がありました。

参加者からは、独自の技術で米作を展開し、消費者から支持を受けているが、後継者に託すことは考えられない現状や、産業廃棄物置場が水源地に設置されようとしていて不安だとする訴えなどがありました。

第2回（6月14日）では「東広島市の農産物の生産と消費」と題して、東広島市の農地の大半を占める稲作と、消費者の多様なニーズに応じて生産されている野菜作を話題にしました。稲作では安定した生産体系が築かれており、田園風景は市民に安らぎを与えていますが、野菜栽培では稲作と違って、市場に対応した規模で複雑に展開されており、収益には結びついているようですが、収穫出荷に伴う労働が集中するなど、維持し持続するには困難が伴っています。また、地域の環境との関係においても、稲作とは同じようには捉えられないことと、消費者は安全で安心な農産物を求め低農薬、有機栽培などに関心を持ちますが、流通する有機物堆肥には銅、亜鉛などの重金属を含む下水処理汚泥が含まれ、また、家畜の糞尿が利用されたものには、遺伝子組み換え作物の飼料が用いられているなど、ほんとうの安全で安心は、決して簡単に得られるもの



でないことも話題になりました。農産物に対する安全と安心を確立するには、生産者と消費者が話し合い、お互いに理解しあわなければならないのだなと感じました。

第3回（6月21日）には「農業の現場の話題から、後継者、施策、技術など」と題して、まず前回に引き続き、消費者が誤解しがちな、化学肥料と有機肥料の役割や、使用する除草剤や殺虫剤などについて、正しい知識を持って対処しなければならないことが補足されました。次いで地域野菜で生産者と消費者の双方に豊かさと喜びをもたらす育種事業について、広島県農業センターで行っている「農業ジーンバンク」を取り上げ、広島県のお宝野菜による地域農業の活性化の事例を紹介してもらいました。

ジーンバンクに保管されている種子は、野菜類、豆類、雑穀類など5,000点に及び、生産者を支援し、消費者の要望に応えられる体勢にあります。しかし実際に利用されるには、個人的な要望は別として、産業としての生産、流通、販売までのルートが確立されなければならないという困難な問題を抱えています。ここでも市場での評価が大切になっており、消費者の理解と積極的な参加が重要であり、期待されていました。

現在の農業には、担い手の高齢化、後継者不足、耕作放棄地の増加などの問題があり、東広島市の農業を維持し持続させるには、農業者が農業で生活できることが最も大切な条件となりますが、市民からの理解を得るのはかなり難しいかもしれません。しかし健全な農業が果たしている多面的機能が正しく評価されるならば、この理解は深まると指摘されています。

地域の農業を健全に維持しながら環境を保全するには、地域のため池や水路の維持管理が欠かせません。ここには市民の積極的な参加が必要であり、市民の農業感覚や農業への理解が不可欠となります。これらを醸成する仕組みを持つことも東広島市民の課題となっています。

第4回（6月28日）には「農業の多面的機能は活かされているか」と題して、市民の生活と直接結びつく市民農園を取り上げ、東広島市園芸センターと西条農業高校からも話題を提供してもらいました。参加者からの発言・意見が多くでて、予定していた農業と福祉や教育との関係は、残念ながら話題にできませんでした。

田園都市に住む市民の誇りや楽しみは、豊かな景観だけではなく、市民農園や菜園を生活に取り入れ、家族や地域の人々と作業や収穫を共に喜びあえることにあります。市内には利用できる休耕地などが目につきますが、残念ながら東広島市の都市計画には市民農園や緑地帯への配慮はなく、農林水産課や園芸センターでも、これまでこれらに関心の対象にしていません。

西条農高は、4年前に創立100年を迎えた伝統ある農業校ですが、現在はスーパー・サイエンス・ハイスクールの指定を受け、フロント・サイエンスを指向しています。市民農園には、教育実践活動として早くから（1993年）取り組み、全国の農業高校に先駆けて開園し注目されています。生徒達は、野菜作りの指導などで入園者（市民）と積極的に交わり、開かれた学校づくりに貢献しています。規模は85区画あり、入園期間は4月から3月までの1年間、1区画は4×5mで、栽培は野菜中心となっています。入門者には適しているようですが、本格的に楽しむには問題を残しているようです。

東広島市園芸センターでは、主に野菜や花卉の栽培技術を教授し、農業の新しい担い手（新規就農者）の育成を目的としています。市民の関心や疑問にも応え、園芸まつりを毎年春に開催して、好評を博しています。センターでは、市民の野菜と花作りへの強い関心を感じ取っており、市民農園への取り組みもあり得ると感じられました。

東広島市には、園芸センター、西条農高、農業技術センター、広大などがあり、市民の理解を助け、活動を支援する施設や専門家に恵まれています。これらを積極的に活用し役立てる工夫をすることが、市民にとって大切であると感じました。

今回の講座では、健全な地域農業の維持と持続には、市民の積極的な参加が不可欠であり、まず市民との話しあいからはじめ、お互いの理解を深めあうことだと考えたのですが、その入り口にも到達し得なかったと反省しています。